

くも膜下出血による高度の記憶障害の患者が、

脳ぼちを実施し記憶障害が改善した症例の経験

正分ゆい¹⁾、吉田圭¹⁾、山田寛之²⁾、藤野文崇³⁾

1) エントレリハ

2) 地方独立行政法人 りんくう総合医療センター

はじめに

記憶障害を呈した利用者さんに対し脳機能トレーニングソフト脳ぼちを用いた脳機能トレーニングを実施し記憶力が改善した症例を経験したので報告する。

症例紹介

対象は2013年12月くも膜下出血発症した50代女性である。リハビリテーションは発症直後より2014年6月まで入院にて実施した。退院後のADLは記憶障害により監視が必要であった為、8月より当施設の利用が開始となった。

初回評価

運動、感覚障害は認めず。基本動作は自立レベルであるがADLは記憶障害のため監視が必要であった。FIMの認知項目は20/35点、脳ぼち課題の正答率は、記憶課題が50%、計算課題が85%、目と手の協調課題が70%であった。

プログラム

脳ぼちを用いたトレーニングはタッチパネル上の光った数字を押す目と手の協調課題、タッチパネル上の光った数字を記憶し消灯後にタッチパネル上の数字を押す記憶課題、タッチパネル上の2つの光った数字を記憶し計算する計算課題を実施した。

7か月後評価

FIMの認知項目は29/35点となり、脳ぼち課題の正答率は、記憶課題が95%、計算課題が98%、目と手の協調課題が70%となった。

考察

認知症高齢者に対し計算や音読課題が認知機能改善に有効であったとの報告は散見される。今回の利用者においても計算課題が記憶障害の改善に影響を与えたと考えられ、脳ぼちは記憶障害のリハビリテーションに有効である可能性が示された。